

「モーセ2：このままでは終わらない」

先週の日曜日にお話ししました。私達が過ごしました2016年という一年は確かに「私達の人生の一部」となりました。私達が歩み始めています2017年もこれから「私達の人生の一部」となります。しかし、2016年の一年間も2017年の一年間も「私達の人生の全て」ではありません。それらは私達が重ねてきました、そしてこれからさらに生きていく「人生の一部」にすぎないのです。

しかし、時に私達はその一年が全てであるかのように勝ち誇ったり、反対に深く落ち込んでしまうことがあります。いいえ、一年と言うまでもなく、ある一日をして、自分が人生の勝利者と思い、反対に自分は敗北者だとも思います。

先週はモーセの誕生から40歳の時までのことについてお話ししました。彼は気力、体力共に最も充実している時に、勇み立ちますが、もろくも挫折し、エジプトを追われて、ミデアンの荒野に逃れていきます。それはモーセの人生の全てではなく、モーセの人生の一部でした。後、40年間、モーセはこの荒野で暮らすこととなります。しかし、それもモーセの人生ではありません。その40年もモーセの人生の一部なのです。

先週はイエス・キリストがなぜペテロという男を12弟子の一人として選んだのかということについてもお話ししました。使徒行伝はこのペテロについて「人々はペテロとヨハネとの大胆な話しぶりを見、また同時に、ふたりが無学な、ただの人たちであることを知って、不思議に思った」（使徒行伝4章13節）と記しています。そう、彼は無学な、ただの人でした。しかし、イエス様はこのペテロを選びました。ペテロは漁師であり、日々の重労働は彼に屈強な肉体を与えたことでしょう。ですから体力には問題はなかったでしょう。しかし、そのキャラクターには大いに問題がありました。彼は情に厚い人で、情熱はあるのですが、多くの失態をおかしました。気が短いところもありましたし、余計な一言が多いのです。

しかし、それでもイエス様は彼を選びました。なぜなら、彼は自分の心にある罪というものに気がつくセンスを持っていたからです。彼は神の前に自分は罪人であるということを誰よりも知っている人でありました。イエス様はそのところに着目しました。性格的に知的にペテロ以上の人はエルサレムにもガリラヤにもたくさんいたはずですが、ペテロにはそんな心があっ

2017年1月15日 「モーセ2：このままでは終わらない」

たのです。言うなれば、他のことが足りなくても、粗削りの性格であっても、神の前に自分はどんな人間なのかということを知っているのなら、神様はその人を作り変えることができるのです。なぜなら、その下地が十分にその人にはあるからです。ペテロに関していえば、彼が足りないものは後に整えられるということをイエス様は知っていたのでしょう。そして、実際に彼は後に別人のように変えられ、初代教会のリーダーとなるのです。

さてモーセです。40歳の頃、同胞への思いからエジプト人を打った時、彼の腕力と知力は充実していました。しかし、その一番充実していた時に彼は何もないミデアンの荒野に逃亡したのです。1、2年ならまだしも、彼はそこに40年もの間、すなわちその年 80歳になるまでその所で羊飼いととしての生活をしたのです。彼の人生のプライムタイムを彼は何もない荒野で過ごしたのです。このようなことを私達は「都落ち」とか「左遷」と言います。

物を失うならまた取りかえすことができます。しかし、時間だけはそうはいきません。そのような意味でモーセは自分の人生のうち、40年という長い年月をととても単調な日々を費やしたのです。

彼はそこでチッポラという女性に出会い、彼女はモーセの妻となり、家庭を築きます。夫であり、父となったモーセは来る日も来る日も朝、まだ暗いうちに起きて、羊を連れ出して荒野に出て行き、どうやらこうやらわずかに生える緑の草を探し、羊を養うような毎日を過ごしていたのだらうと想像します。乾ききった大地に照りつける太陽が日中、焼けつくようにモーセを照らし、夕になると真っ赤な太陽が大地に沈んでいく。そんな単調な毎日が一月、一年、十年、そして四十年続く。自分の周りの環境は何も変化しませんが、モーセ自身は齢をとり、顔にはシワが増え、髭には白いものが混じってきます。それがモーセのミデアンでの日々でした。

かつては同胞をエジプトから救い出すのだという熱い思いをもっていました。実際にそれが可能なのではないかと思うほどに、彼はエジプトという国の中枢にいました。エジプトの王宮にいた時は召使が彼の前に膝まずきました。しかし、今、彼の前に伏しているのは羊の群れです。自分の人生はこのまま人知れずに、この荒野で終わるのだらうと思ったに違いありません。

創世記46章34節を見ても「羊を飼う者はすべて、エジプト人に忌み嫌われる」と書かれています。「エジプトのあらゆる学問」を究めたモーセは、かつて自分が王子として住んでいたエジプト人の忌み嫌うことに40年を注ぐことになりました。

弱い羊を養い導くためには、忍耐を要します。性急なモーセも、羊と共にゆ

2017年1月15日 「モーセ2：このままでは終わらない」

るやかに歩むことを学ばなければなりませんでした。そして、それこそがこの後、彼が数百万ものイスラエルの民を40年もの間、荒野で導くために絶対不可欠なことでした。詩篇77章20節は言っています「あなたは、その民をモーセとアロンの手によって羊の群れのように導かれた」。また、民数記12:3にはモーセは「全ての人に勝って柔和であった」と書かれています。自分の思う通りには動かない羊を導くには長い年月の訓練が必要だったでしょう。そして、それによって学んだことが彼の後に不可欠なことになりました。「自分の思うようにはいかない」という中で、彼は「全ての人に勝る柔和」を得たのです。

これらの事は全て、このミデアンの40年に培ったものだったのです。空虚と思われる荒野の40年こそが次に進むためにモーセにとって最も必要な場所だったのです。荒野で額に汗して働くということ、それはエジプトの宮殿ではしたくても経験できない事でした。羊の毛を刈って、加工し、毛布を作る、乳をしぼる、乳製品の製造、毛皮をはいで天幕や上着を作ること、肉を塩づけして貯蔵すること、他の遊牧民との交渉の仕方、荒野の地理、天候、風土、言葉。これらはエジプトでは何一つ学べないことでした。そして、なによりも荒野の静寂の中で静かに神と自分に向き合う日々……。

誰も気がつかなかったでしょう。モーセ本人ですら気がつくことはなかったことでしょう。しかし、それが神の計画でした。モーセは知らぬ内に“その日”のために整えられていったのです。神様の計画はあまりにも高くで壮大で私たちには掴みきれません。この無意味に思えるようなミデアンの荒野での経験なくして、この後の40年、彼が数百万ものイスラエルの民をエジプトから導き、荒野を旅するということは成し遂げられませんでした。もし彼がエジプトで机上の学びだけをした直後にイスラエルの民と共に荒野へと導かれていくのなら、彼らは過酷な荒野での生活に打ちのめされてしまったことでしょう。

「神は神を愛する者達、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」(ローマ8章28節)とあるとおりです。

そんなミデアンの40年が経った頃、モーセは神の山ホレブにやって来ました。ふと見ると、しばが燃えているのが見えました。しかし、その火は確かに燃えているのですが、そのしばはなくならないのです。こんなことはありえないことです。物が燃えているのに、それが燃えつきないということはありません。

彼は私たちも、おそらくそうするように、こう思いました「行って、なぜし

2017年1月15日 「モーセ2：このままでは終わらない」

ばが燃え尽きないのか見てみよう」。彼がそのしばに近づき、見定めようとした時に、神はしばの中から彼を呼んで言ったのです「モーセよ、モーセよ」。彼は「ここにいます」と答えました。神様は言われました「ここに近づいてはいけない。あなたの足から靴をぬぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」(出エジプト3章5節)。

今、イスラエルの人々の叫びがわたしに届いた。わたしはまたエジプト人が彼らをしえたげる、そのしえたげを見た。さあ、わたしは、あなたをパ口につかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」(出エジプト3章9節-10節)。

ちょっとお待ちください！この時、モーセはいくつになっていましたか？彼はその年、80歳となっていたのです。人間の年齢として考えるならば、どう考えても、それは無理であり、不可能なことであります。40年におよぶミデアンの働きからリタイヤして、後は自分の子供や孫に任せて身を引く年齢です。言うまでもなくそのことをモーセ自身もよく分かっており、彼はすかさず答えています「わたしは、いったい何者でしょう。わたしがパ口のところへ行って、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか」(出エジプト3章11節)。

かつて意気揚々、体から力がみなぎり、あのエジプト人を打ち負かした時ならまだしも、まだ気持ちにおいても力満ちる時ならまだしも、彼のそれら可能性のある年月は寂しい荒野の40年で過ぎ去ってしまいました。なぜに、そんなプライムタイムを見過ごして、80歳になった彼に神様は声をかけるのか・・・。

なぜこの40年の間に神様は気力体力共に一番、脂がのっている若い人に、このミッションを任せなかったのか？それに相応しいと思われる者達もきつといたことでしょう。しかし、このことが神の計画であり、このことが神様のみ心だったのです。モーセのうちにあった己の力だけにより頼む心は砕かれ、彼の心はそのことを認めるにいたりました。今後の生活はただ上からの神の力による以外はない。私がこれから成そうとすることは、あなたの力によらず、完全に私の力によるのだということを神は示されたのです。その時がくるまで神様は待たれたのです。

これらの事をモーセにさらに確認させるように神さまは燃えるしばを眺めるモーセに言われたのです「ここに近づいてはいけない。足から靴を脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」

2017年1月15日 「モーセ2：このままでは終わらない」

これからあの巨大なエジプトから、そこに奴隷となる同胞の民を救うために、神様はモーセのために燃えるしばの傍に幾千もの鎧と剣を備えてはいませんでした。これから色々と必要だからと軍資金をしばの傍らに置くこともなさいませんでした。ただ一言、神様は言われたのです、「あなたの靴を脱ぎなさい」

地震が起きた時に、被災者にとって一番、大変なことは靴をはかずに裸足で逃げるのだということを知ったことがあります。このようなことは実際、体験しないと分からないのですが・・・でも、想像してみてください、夜中、寝静まっている時に、大きな地震で家が揺れる。全ての物は床に叩きつけられ、全ての棚は倒れ、陶器が砕けて散乱している。停電となり、とにかく外に逃げようという時、もし靴がなかったらどうですか。メチャメチャに割れたガラスの上を裸足で歩くことを考えただけで、足の裏がうずみます。灼熱の太陽によって焼けるほどに熱くなり、砂の中に眠る様々な危険な昆虫や動物がいて、サボテンやらごつごつとした岩や石が転がる荒野を裸足で歩いている人はいません。それは不可能なのです。そのようなところで靴を脱いで生きることはいけません。

しかし、神様はモーセに「あなたの靴を脱ぎなさい」と言われました。この言葉に従う時にモーセはあのエジプトと向き合うために完全に整えられたのです。このことを通して己の力により頼むのではない、完全に神だけにより頼んでいく、そのことを神様はモーセに示されたのです。彼がエジプトの学問を究めつくした時、人はその時が来たと思います。しかし、その時は神の時ではなく、彼が完全に神様だけに寄り頼んだ時こそが"その時"だったのです。そう、そのことを学ぶ年月がミデアンでの40年だったのです。

あのアブラハムに「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」(創世記12：1-2)と神様のお声がかかったのはいつでしたか？彼が75歳の時でした。モーセと同じように、かつて持っていた自分の力が、そぎ落とされた後のことでした。

あのギデオンが敵と対する時に、彼のもとには32000人の兵士がいました。しかし、神様は彼に語られたのです「あなたと共にいる民はあまりに多い。おそらくイスラエルはわたしに向かってみずから誇り、わたしは自身の手で自分を救ったのだと言うのであろう」(士師記7章)。

ゆえに神様は32000いた兵士を10000に減らし、されに、それが最

2017年1月15日 「モーセ2：このままでは終わらない」

終的に300人へと減らされました。戦の勝ち負けは兵士の数によります。これは、私たちの常識です。しかし、神はあえて完全に無力な者達をして、完全に神に委ねることを彼らに教え、勝利をとられたのです。

イエス様が自身で選ばれた12弟子たちはどうでしょうか。このグループを見た者達は、「さすがにイエスだ、いい人材だ」という人たちでしたか。いいえ、彼らを見た人たちは驚き呆れたに違いありません。神様は不完全な者を選びましたが、後に彼らが完全に神に信頼することにより、驚くべき神のみ業がなされたのです。

山崎豊子さんの小説をもとにして作られましたドラマ、「沈まぬ太陽」を観ています。主人公の恩地元（おんちはじめ）は国民航空の労働組合委員長を務めたためにパキスタンのカラチ、イランのテヘラン、アフリカのナイロビと僻地に送られ続けます。当初パキスタンは二年、テヘランも期間限定と言われて赴任します。その過酷な赴任は家族にも少なからぬ影響を与え、いよいよテヘラン任務を終え、帰国だろうという矢先に今度はアフリカへの辞令がきます。そのために母親の死に目にも立ち会うことが出来ません。その間、心が折れてしまうようなことを恩地は幾たびも経験します。そうです、彼には先が見えないのです。帰国日が決まっているのなら、その日を目指して、それを励みに業務にあたる事が出来ますでしょう。しかし、会社からは何度も裏切られ続けます。

私は「沈まぬ太陽」という作品を読んだことがないので、このドラマがどんな結末になるのか分からずにおりますが、私はドラマの中の恩地元本人ではなく、この物語をテレビ番組として見ている視聴者ですので、「恩地よ、このままでは終わらないぞ」という思いを持ちながら見えています。そうです、「かつての同僚、行天四郎は己が信念を曲げ、日本で出世街道を歩んでいるけれど、あなたは彼とは比べものにならないほどの貴重な体験をしている。そして、それは必ず後にとつもない力となって返ってくるはず」と確信しているのです。

そして、ふと思うのです。私が恩地に対して抱いている思いは、どちらかという神様の視点に近いのです。なぜなら、ドラマの中の恩地は先が見えずに、その日その日に精一杯なのですが、私はこのドラマにおいて恩地がそのままで終わるはずがないということを知っているからです。ここがドラマの中の恩地とテレビの視聴者との徹底的な違いであり、それはそのまま今、諸々のことに直面して一喜一憂している私達と全てを存じていらっしゃる神様との違いなのです。

2017年1月15日 「モーセ2：このままでは終わらない」

私達は思うことがあります。一体、この自分が今おかれている状況は何なのか。この状況の中で自分は埋もれていくのか。何という遠回りをしているのだろうか。このことが自分の人生にとって何か益となるのだろうか。モーセの場合もそうなのです。普通に考えればモーセの生涯はかつてのエジプトの王子が、逃亡して荒野でその生涯を終えたということで終わるのです。しかし、私たちが信仰の目をもってこの物語を見ていくのなら、私達には到底、思いも浮かばないことが、このモーセの40年にあることを見出すことができるのです。

私達にはその時はなぜ、このような状況に自分が置かれているのだろうと分からないことが多々あります。しかし、そのような時にこそ神様は私達に語りかけております。その直面している問題よりももっと大切な、私達に益となることに気がついてほしいことがあるのです。そして、それを知る時に私達は確かに昨日の自分とは違う自分となっているのです。ましてやその時に自分の弱さということに気がつかされるのなら、私達は神の力に目を注ぐことができるようになるのです。言うまでもない、私達の力と知恵はいかほどのものでしょう、それに対して神の力と知恵はどんなに大いなるものでありましょう。

主にある兄弟姉妹、どうかこのことを心に留めて今日はお帰りください。今日の挫折が人生の全てではありません。昨年、一年間、試練ばかりだったということが私達の人生の全てではありません。その一日は、その一年はその前後と関わり合って一つ所に向かっているのです。私達はまだ私達の人生の全体を見ていないのです。ですから私達は下を向いて絶望するのではなく、上を見上げて神のみ心に思いを寄せるのです。今日も一日、精一杯、私達ができる最善を尽くしましょう。己が限界を謙虚に認め、神により頼みましょう。私達の人生は私達の最善と神の摂理によって、その完成の途上にあるのですから。お祈りしましょう。